

タンガロとジユジロー

富田虎男

タンガロは、ラナルド・マクドナルドという男が、一八四八（嘉永元）年に日本海で米捕鯨船から降りてボートで鎖国下の利尻島に単身上陸したときに出会って、友だちになった人物である。W・ルイスと村上直次郎編の『マクドナルドへ日本回想記』によると、タンガロー「Tangaro」は「質問のかたまり」のような男でマクドナルドから英語を学び、彼に日本語を教えたとある。彼は短期間で英語に上達し利尻島から宗谷の勤番所まで通訳としてマクドナルドにつきそい、別れるときには眼に涙を浮かべていたという。

このタンガロという発音に見合った日本人名は見出しにくい。そこでマクドナルドが『日本回想記』のなかで名をあげている二人のオヤカタ「親方」、ケモン「Kemon」とケチンザ「Kechinza」とともに、タンガロがだれかをつきとめようと思った。最初に手懸りが得られたのはケモンである。利尻島の蔽島神社を訪れたとき、花崗岩の鳥居の片方の柱に阿部喜右衛門、もう一方の柱に天保九年三月と刻まれているのに気づいた。天保九年はマクドナルドが上陸する一〇年前である。鳥居を奉納できるほどの人物喜右衛門は「親方」と呼ばれるにふさわしいが一〇年後も利尻島にいたかどうか。それを確かめるためには、

タンガロとジュッロー

利尻島一帯を支配していた場所請負人の文書を見つけないければならない。

それは札幌にも函館にもなく、松前町史編纂室にあった。二種類の写本『嘉永七寅年 藤野家文書 番人稼方人数調子書』リイシリ運上家と、『安政三辰年八月 支配人番人稼方勤仕帳』リイシリ運上家である。嘉永七年（一八五四年）はマクドナルドの上陸の六年後、安政三年（一八五六年）は八年後にあたる。喜右衛門の名は『勤仕帳』の第一頁の筆頭にあつた。「当辰年迄三八年 松前町川原町 喜右衛門 当辰五拾六歳」。勤統三八年の彼は、一八四八年に間違いなく利尻島にいた。これでケモンは喜右衛門と確定できた。

次はケチンザである。手懸りはマクドナルドが述べている「親方」と「年寄り」の二点である。これに該当する人名は前者の『人数調子書』の筆頭にあつた。「弘化二年より 松前町博知石町 当寅年迄拾ヶ年 喜平治 当寅六拾八歳」。弘化二年（一八四五年）はマクドナルドの上陸の三年前で、勤統一〇年の喜平治も一八四八年に利尻島にいた。年齢も当時六二歳で「年寄り」であつた。これでケチンザは喜平治と確定できた。

いよいよタンガロである。手懸りはまず末尾の口、これは、「郎」で終わる名前であろう。頭文字のタは多分Tで始まる可能性が大きい。そして役柄からいって「稼方」ではなく、「番人」であろう。一八四八年当時からいる番人で郎で終わるものを両方の文書から抜き出すと、善次郎、忠次郎、喜次郎、多次郎（多治郎）、松五郎、重太郎の六人となる。このうち表記法によっては忠次郎も有力だが、最有力候補は「A」で始まる多次郎（多治郎）である。「天保一四年から 松前大沢村 当寅年迄拾貳年 多次

郎（『勤仕帳』では多治郎） 四拾五歳」。天保一四年（一八四三年）から勤統一二年の多次郎は、一八四八年当時も利尻島にいた。タンガロとはこの多次郎のことではなからうか。ただこれは全く推定の域を出なかつた。

ところが、その後カナダのブリティッシュ・コロンビア州文書館で見た後年のマクドナルド自筆の手紙のなかに、このタンガロに当る人物の名が「Tajaro タジャロ」と表記されているのを発見した。一八九一年六月四日付と同年十二月二五日付の二通の手紙の中である。これでタンガロは多次郎（多治郎）と確定することができた。タンガロは、多分草稿から印刷までの過程で生じた編集上のミスであろう。

一方、ジュジローは、マクドナルドが長崎に送られて大悲庵の座敷牢に監禁されたときに、彼から英語を教わつた一四人の和蘭通詞の一人の名である。彼の名は『日本回想記』の編者ルイスと村上が記した一四人の通詞名簿では、十一番目に、Inderego Horn インデレゴ・ホーン（ホルン）と表記されている。しかしこれに該当するような日本人名は考えられない。かつて『長崎洋学史』で古賀十二郎は、これに「稲部禎二郎」をあててみたが、後に撤回して「不明 綴字正しからず」と訂正した。一つの見識である。また『日本近世英学史』で重久篤太郎はこれに「堀一郎」をあて、さらに堀達之助も十四人の門下生のなかにいたと思われる、としていた。

ところが、ブリティッシュ・コロンビア州文書館所蔵のマクドナルド自筆の門下生名簿「*Voze-Catala or Interpreters*」通詞方つまり通訳に当つてみたところ、Inderego Hornではなく、Judgero Horyn

タンガロとジュジロー

あった。ジュジロー・ホリと読める。これは堀姓の通詞であるが、一郎でも達之助でもない。ジュジローに相当する堀姓の通詞はいないか、八方手を尽くして探していたある日、北海道の英学史家長谷川誠一氏から向井晃氏提供の「長崎奉行蘭学通詞弘化四年未年順名」のコピーが送られて来た。弘元四年（一八四七年）といえは嘉永元年の前年である。なんとそこには堀寿次郎の名が載っているではないか。ほかの十三人の門下生の名も、また堀達之助の名も記載されている。これでジュジロー・ホリは堀寿次郎であると確定することができた。研究者同士の協力の賜物である。ただし堀寿次郎の人物像は未だ不明である。

こうしてタンガロとジュジローの探索の旅は終わった。二人は多次郎と堀寿次郎という本名で呼ぶことができるようになった。しかし、二人の名が確定できたところで、天下の形勢にはなんの影響もないではないか、そのような瑣末なことに精力と時間を費すのは無駄なことではないか、という疑問の声が聞こえてきそうである。もちろん、米国大統領の親書を携えたペリー提督と徳川幕府とのトップレベルでの交渉も開国史の重要な一面面であろう。しかしそれだけが歴史ではなからう。その五年前に、マクドナルドというインディアンと白人の混血青年（米国ではインディアンとされる）と、多次郎という一庶民や十四人の通詞という知識人たちとの民間レベルでの交流があったという史実を明らかにすることも、それに劣らず大切なことではないだろうか。ペリー再来時に急遽長崎から呼び出されて、幕府の主任通詞役を勤めたのが、マクドナルドの十四人の門下生の一人森山栄之助（多吉郎）であったことは、たんなる偶然ではないであろう。

たしかに庶民多次郎は、歴史の表層に顔を出してはいない。だからといって多次郎の名などどうでもよいということにはなるまい。名前は個個人にとってアイデンティティにかかわる、ときには生死にかかわる大切なものである。そのことをA・ヘイリーの『ルーツ』の主人公クンタ・キントは教えてくれた。アメリカに売られて来た彼は自分のアフリカ人としてのアイデンティティを守るため、アフリカ名を捨てて英語名を受け入れることを拒否した。そのため彼は血みどろになって気絶するまで鞭で打たれた。他人事ではない。かつてアイヌに、そして半世紀前には韓国人・朝鮮人に、日本名への改名「創氏改名」を強制したのは、われわれ自身ではなかったか。その意識は今も消えたとはいえない。

われわれが、顔の見え息づかいの聞える民衆の歴史を描こうとするならば、一人一人の肉声や容姿の再現まではともかく、せめてその名前だけでも取り戻すことは、決して瑣末なことではないのである。マクドナルドと多次郎の出会いもさることながら、それにもまして私が心を打たれたのは、マクドナルドとアイヌの邂逅であった。漂流を装って鎖国下の日本に潜入しようとしたマクドナルドを助け、草履をはかせ手をとって利尻島の番屋まで案内したのは、場所請負制の下で酷使されていたアイヌのひととであった。アメリカ先住民インディアンの子マクドナルドは、北海道の先住民アイヌにまずめぐりあい、助けられたのである。この邂逅に、私は運命的なものさを感じた。そして両先住民に対する日米両国政府の同化政策の比較・関連の歴史的研究に傾いていった。それからもう一〇年余になる。

(立教大学文学部教授)